

第9回実演芸術連携フォーラム

【日 程】2018年10月2日（火）13:00～16:30

【会 場】兵庫県尼崎市青少年創造劇場ピッコロシアター 小ホール（兵庫県尼崎市南塚口町3-17-8）

【参加費】無料

【時間割・パネリスト】

13:00～13:15 開会挨拶 米屋 尚子（芸団協 実演芸術振興部長）

13:15～14:15 第1部「人材交流から描く未来図～国内専門家フェローシップ研修報告から」

佐々木 真美（島根県芸術文化センター グラントワ いわみ芸術劇場）

津内口 淑香

進行：米屋 尚子（芸団協 実演芸術振興部長）

14:25～16:30 第2部「市民と芸術をつなぐ担い手として～劇場とアーティストの事例から」

知念 百合香（南城市文化センター シュガーホール）

山口 英樹（伊丹市立演劇ホール アイホール）

田窪 哲旨（兵庫県ピッコロ劇団）

進行：森岡 めぐみ（いづみホール）

※（ ）内の所属は2018年10月時点のものです

【手話通訳】公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会

【協 力】公益社団法人全国公立文化施設協会／劇場、音楽堂等連絡協議会／公共劇場舞台技術者連絡会

第1部 「人材交流から描く未来図」

～国内専門家フェローシップ研修報告から～

第1部では、各地での文化事業の実施にも欠かせない実演芸術分野の専門の人材をテーマに取り上げました。文化施設、芸術団体という枠組や職域、地域を超えた人材交流を通して生み出される団体間のネットワークと、各地のキーパーソンとなる人材の創出は、全国での実演芸術振興の基盤となり得るものです。「国内専門家フェローシップ制度」の平成29（2017）年度対象者のなかから、2名による研修報告を行い、人材交流がもたらす効果と可能性を考えました。

なお佐々木真美さんの報告内容は、第8回実演芸術連携フォーラムのレポートをご覧ください（15ページを参照）。

国内専門家フェローシップ制度 平成29（2017）年度対象者一覧

※所属および報告内容は、2018年7月時点に基づくものです。

氏名	専門職能	派遣元（所属）	研修受け入れ団体	研修期間
石川 絵理	アートマネジメント	NPO 法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク	ビッグ・アイ共働機構 国際障害者交流センター ビッグ・アイ	2017年10月5日～ 2017年12月3日
小川 恵祐	制作	南城市 シュガーホール	公益財団法人しまね文化振興財団 島根県芸術文化センターグラントワ い わみ芸術劇場	2017年11月22日～ 2018年1月17日
五田 詩朗	制作	NPO 法人こどものみかた	公益財団法人川崎市文化財団 ミュージアム川崎シンフォニーホール	2017年10月18日～ 2018年1月31日
佐々木 真美	制作	公益財団法人しまね文化振興財団 島根県芸術文化センターグラントワ いわみ芸術劇場	公益財団法人せたがや文化財団 世田谷パブリックシアター	2018年1月20日～ 2018年2月28日
高橋 郁乃	アートマネジメント	公益財団法人新潟市芸術文化振興 財団 アーツカウンシル新潟	公益財団法人京都市音楽芸術文化振 興財団 ロームシアター京都	2017年10月1日～ 2018年2月28日
津内口 淑香	制作		公益財団法人神奈川芸術文化財団	2017年9月1日～ 2018年2月28日
樋口 寿弥	運営管理	アクティオ株式会社 知多市勤労文化会館	公益財団法人可児市文化芸術振興財団 可児市文化創造センター	2018年1月5日～ 2018年3月4日
目原 瞬	舞台技術	公益財団法人水戸市芸術振興財団 水戸芸術館	(公財)北九州市芸術文化振興財団 北九州芸術劇場	2017年12月14日～ 2018年2月12日

津内口 淑香 | 俳優・制作者

応募に至った経緯、および研修目的

「劇団唐ゼミ☆」に学生時代から所属し、俳優、制作として携わってきた。野外での公演活動のなかで、地域の人たちと関わる面白さに目覚め、そうした面の専門性を磨き、職能として成立するところまでレベルアップしたいという思いがあった。劇団の拠点でもある横浜市にあるKAAT神奈川芸術劇場への親しみと憧れもあったが、折しも神奈川県が実施するマグネット・カルチャー¹⁾（以下、「マグカル」）の全県展開推進事業がKAATを拠点に展開されることを知り、この事業に携わることで屋内上演にこだわらない実演芸術の可能性や、地域との関係づ



くりを長期的に学びたいと考え、研修を希望した。

【研修期間】 2017年9月1日～2018年2月28日

【研修受入団体】 公益財団法人神奈川芸術文化財団

【主な研修場所】 地域コンテンツ推進事業事務局（旧マグカル全県展開推進事業事務局） ※KAAT神奈川芸術劇場内に事務局が置かれている

【研修内容】 県内の文化資源（コンテンツ）および実施可能な場所の調査／県内の芸術団体、市町村等の文化担当者の課題や要望の調査／地域性を活かした公演の企画制作、市町村等への提案／市町村等や住民との協働モデルの実践

研修の成果と課題

まず、マグカル全県展開推進事業チームの事務局が置かれているKAAT神奈川芸術劇場（以下、「KAAT」）に通うなかで感じたことは、財団や劇場は実演芸術の専門家が常駐している場所として、県から大きな期待を寄せられていること。しかし、劇場には劇場の事業がありますし、全県展開における中心的役割を新たに担うには、現状の人員の面で現実的ではないと感じました。専門人材の適切な配置についても考えさせられました。

半年間という長期にわたる研修では、事業企画の立ち上げから実施、報告まで、すべての行程を体験することができました。自身が携わった企画提案やマッチングでは、画廊でのアルバイト経験も活かす機会になりました。展示やワークショップといったイベントへの直接協力だけでなく、自治体担当者の悩みや要望を受けて、学芸員やアーティストを紹介したり、自治体が持続的かつ自発的に実施していけるような人脈支援も行いました。市町村の文化担当者からは、文化芸術の専門家がいないのでどうしたら良いのか分からないという相談が多く、行政と文化芸術の専門家をつなぐ機能を、自分たちが担えるようになればと思うようになりました。

また、2017年に神奈川県が招へいたベトナムサーカス団の県内巡回公演を、2018年度に実現できるよう、県内文化施設のコーディネートに携わりました。国外アーティストの招へいに関わることで初めて経験で、どんな実務が必要なのか、制作者としても大きな学びがありました。

地域の文化資源調査、それに基づく企画提案では、鑑賞を超えた体験をつくりだすことができたのではないかと感じています。神奈川県という地域を土台とすることで、文化事業の魅力をより強く押し出す、知らなかった神奈川の魅力を発見する、そうした相乗効果を生み出す提案をこれからもしていきたいと思いました。

今後の展望

研修を終えた後、4月からはマグカル地域コンテンツ推進事業のプログラムオフィサーとしてあらためて勤務することになりました。研修を経て、引き続きこの事業に携わりたいと思ったからです。

現在は、研修中から携わっていたベトナムサーカス団の巡回公演が目前に迫っています。この公演を先例として、今後も県内各地の劇場に足を運び、それぞれの実情に耳を傾けながら、県内巡回公演等の可能性を探っていきたくと考えています。

実は、KAATの方々からも、マグカル全県展開チームは何をしているのか分からないと言われることが多いのが現状です。やり方を模索している最中ではありますが、地域での活動がいつかKAATにも新たな展開をもたらすことができるのではないかと考えています。県内巡回公演の企画や、県内各地の劇場・ホール等のデータベース作成等を通して、一步を踏み出したいと考えています。

一方で、劇団員としての活動も続けています。両立は大変ですが、両方の役に立ちたいと思っています。

総括

進行：米屋 尚子（芸団協 実演芸術振興部長）

※佐々木真美さんの研修報告は15ページ（第8回実演芸術連携フォーラム）をご覧ください

米屋 津内口さんは、半年という期間に本当に多彩な経験を積まれて、研修後も業務委託という形でマグカル全県展開推進事業特定の担当者という形で職に結びついた幸運な事例ですね。研修受け入れ先となった神奈川芸術文化財団の方からも一言お願いしたいと思います。

参加者A 津内口さんに担当してもらったのは、2020年オリンピック・パラリンピックの文化プログラムに関する県事業の受託のために財団のなかに置かれた部署で、2017年から全県域での展開が始まりました。

地域コンテンツを調査するなかで、県内の障害者アートや高齢者活動など、いろいろな面が見えてきました。2018年度は同じく県による共生共創事業も新たに立ち上がり、同じチームが動いています。

津内口さんの研修報告を聞いて、劇場と芸術団体との連携というだけでなく、これからは地域を巻き込んだ新しい連携の形が重要になるのかなと思いました。今までは共同制作といった作品を中心にしたつながりがよくありましたが、地域の人たちに参加いただくことでもっと面的な広がりのある連携ができるのではないかと思います。

米屋 佐々木さんは、ご自身が研修に行くだけでなく、同年にいわみ芸術劇場でこのフェロウシップ制度の研修者を受け入れる側も経験されましたね。

佐々木 私が研修に行く前、11月中旬から1月中旬にかけて受け入れました。アートマネジメントを学んでいた方だったので、うちの職員も興味津々で。どうしてグラントワでの研修を希望したのか、いろんな質問をしました。一緒に仕事をするなかで、私たちが学ばせてもらうことも多かったです。

米屋 沖縄のシュガーホールから行かれた小川恵祐さんでした。佐々木さんの担当事業も一緒にやられたのでしょうか。

佐々木 シュガーホールで地域住民と一緒につくる子ども合唱団の運営にも関わってらっしゃるということで、グラントワでも私が担当していた合唱イベントをお手伝いしていただきました。

米屋 第2部のパネリストである、シュガーホールの知念さんからも、送り出した側として一言お願いします。

知念 小川は、大学院を出て初めての勤務先がシュガーホールでした。音楽に携わってきたとはいえ、仕事として関わるのは一から勉強しながらの状態でしたので、職員一年目で研修に行くのは、送り出す側としても正直心配していました。しかし、研修から帰ってきて、グラントワでの事業の取り組み方や、合唱団の公演までのプロセスの違いを目の当たりにしたと報告がありました。小川が持ち帰ってきた内容が、私たちにとっても勉強になりました。

それから、小川の研修を通して得たつながりをこれから大事にしていきたいです。他地域の取組から学ぶことは多いと実感していますので、学ぶ姿勢を常に持ちながら、私たちも頑張っていきたいと思っています。

米屋 フロアの皆様からも質問などありますか？

参加者A 佐々木さんに伺いたいのですが。神奈川は、県の財団が指定管理を受けている劇場が県の東部に集中していて、西部地域の情報不足が課題でした。グラントワは、島根県の西部に位置する劇場として、どのあたりの地域・範囲をターゲットにしているのでしょうか。

それから、世田谷パブリックシアターでの研修を経て、これからグラントワで実際にどう実現しようと思っているか、お聞かせください。

佐々木 島根は横に長い県で、出雲、石見、隠岐と行政上は三区に分かれています。グラントワは石見にあたり、守備範囲としては、県の西半分より少し広いぐらいの感じですが。ただ実際は、石見の最東部まで、グラントワからは車で2時間半、松江からだとも1時間半なので、県東部からの方が近いです。財団内で話し合っ、県中央あたりの川を境に、東の島根県民会館と、西のグラントワで、範囲を分けようということになっています。

そうしたなかで、世田谷パブリックシアターで学んだことを、そのまま同じことをするのは難しいだろうと思っています。すぐに、同じ形をただ取り入れると

1) 文化芸術の魅力で人を引きつけ、地域のにぎわいをつくり出すことを目的とした神奈川県による取組。

いうのではなく、実現するために何が必要か。長い時間がかかるかもしれませんが、まずはそこからやっていきたいと思っています。

今年度からグラントワでは鑑賞者を育成するような講座が立ち上がりました。芸術分野をよく知らなくても参加できそうなプログラムを増やしていくところから始めたいと思っています。

私も津内口さんの研修報告を聞いて、地域と一緒にやっていくためには、まずは調査が必要であることがよく分かりました。地域の劇場として、もっと地域と接する方法を、現実的に考えていかなければいけないんだなど。

米屋 佐々木さんの場合は、ご所属元での業務との関係で、研修時期が『地域の物語ワークショップ』が開始してからという時期でしたね。実はマッチングのプロセスで、中途半端な時期だという理由で、世田谷パブリックシアター側は受け入れを悩まされていました。それでも結果的に得られたものは大きかったでしょうか。

佐々木 もちろん最初から最後まで携わりたかったです。途中だけを見てしまったために、余計にテーマ決定までの過程や発表会までの現場にいたかったなと思いました。

米屋 今日こうして劇場を離れて来るだけでも、制作者は大変ですよ。それでも、無理してでも研修に行ったら良かったという思いを感じます。現場での経験がいかに大きいか、お二人とも、そしてフロアの皆さんも痛感されているでしょうし。

佐々木 私の場合は、劇場職員として1ヶ月不在になることはかなりの不安がありました。実は、研修に応募する1年前から、この制度を活用して研修に行きたいと職場にはアピールしていました。

米屋 研修の重要性は承知した上で、どう実現するかも重要ですね。

参加者B 私の劇場も以前、この制度を活用して職員を研修に行かせていただきました。うちの場合は、本人が希望したわけではなく、こういう研修制度がせっかくあるのだから、誰かを勉強しに行かせたいと考え、「あなたが行きなさい」と指名したので、本人の思いは正直分かりません。

でも、すごくいい制度だと思います。職員の研修については非常にハードルが高いと感じることは確かにあり、組織としての考え方、送り出す側の覚悟が必要

かと。この制度では、派遣元にも給付金はありましたからね。

ちなみに、グラントワは給付金を利用して、人的な保障はしましたか？

佐々木 ほとんどしていません。

参加者B 実際には研修期間中の代替要員を見つけるのは難しいと思うんです。けれど、研修の重要性を職場内のみんなできちんと考えて、一人が研修で抜けても大丈夫だという体制を考えた上で送り出すことができれば、制度の活用の仕方はあると思います。

米屋 ありがとうございます。

2019年度のフェローシップ制度は、募集期間を変えたいと思っています。これまで年度明けから募集、マッチングをしていましたが、皆さんからは応募しにくいというご意見もいただいています。少しでも研修制度として活用しやすくなればと思っています。

もちろん、応募には本人の意思が一番の推進力になるので、こういうことを経験したい、こういう風になりたい、という考えは重要なのですが、各地の劇場や芸術団体の活動情報に必ずしも精通している方ばかりではないと思いますので、研修先の選定や、研修内容の確定まで、第三者がマッチングとして関わるというのが本制度の最大のポイントです。より良い研修の実現に向けて、アドバイスをさせていただける場合もあるのではないかと思います。

自分の力だけでキャリアを広げるというよりも、いろんな人が周りから助けますよ、という制度です。経験値を広げること、その経験を踏まえて人とのつながりを広げていくこと、そのきっかけとして国内専門家フェローシップ制度が活用されればと思います。

第2部 「市民と芸術をつなぐ担い手として」 ～劇場とアーティストの協働事例から～

第2部では、3人のパネリストからの事例紹介と、それに基づくディスカッションを行いました。

市民の「やってみたい！」を引き出すプログラム

知念 百合香 | 南城市文化センター シュガーホール

南城市について

シュガーホールが位置する南城市は、沖縄本島の南部、那覇空港から車で40分ほどの場所です。現在の人口は、約4万4,000人。平成18（2006）年に、4つの町村が合併して誕生しました。

開発から取り残されたがゆえに、古き良き沖縄が残っている部分があります。ユネスコの世界文化遺産に認定された斎場御嶽（せーふあうたき）、神の島と言われる久高島（くだかじま）等、多くの史跡や有形文化財、民族芸能等の無形文化財があり、琉球王朝時代からの歴史文化が色濃く残る地でもあります。

本土復帰後に返還された地域以外は都市開発の制約がありましたが、それが解消されつつある近年、年間2,000人ほどの転入者があります。転出者が毎年約1,500名ですので、毎年500人ほど人口が増えていることとなります。こうした人口増加、IターンやUターン者、子育て世代の人口増加、一方での少子高齢化が、南城市が直面している状況です。

シュガーホールについて

シュガーホール（旧・佐敷町文化センター）は、平成6（1994）年に県唯一の音楽専用ホールとして設立されました。ホール座席数は510席と大きくはありませんが、会議室、図書館、野外ステージが併設されています。開館以来、新人演奏家の登竜門となっている国際オーディションの開催や、文化芸術の教育支援プログラム等、地元の企業や教育機関とも提携しながら事業を展開しています。

シュガーホールのスローガン

このまちに生まれ、生きることに誇りがある
このまちでこそ子どもを育てたい
このまちでは、心の満ちたりた時間を送れる

平成26（2014）年3月には、「第二次シュガーホール（南城市文化センター）活性化計画¹⁾」（平成26年度～平成30年度）が策定され、3つの目標を掲げています。

目標1 音楽を中心とした実演芸術を継承・創造・発信し、芸術家と市民を多様な回路で結びます。

目標2 伝統文化を尊重し、ひらかれたコミュニティ空間として多様な市民をつなぐ市民交流の場とします。

目標3 南城市の未来人材を育成するために、文化芸術の教育支援を通して青少年の創造性を高めます。

家族のような関係を築く市民参加型事業

平成29（2017）年2月に上演した、第2回南城市民ミュージカル『太陽の門（ていだぬじょう）－新ム

1) 南城市が策定する計画で、平成19（2007）年に第一次計画が策定された。

ラヤー版』(演出：富田めぐみ)という事業をご紹介します。市民参加型の事業で、出演者は幼稚園児から80代まで、多様な世代が参加しました。シュガーホールをホームグラウンドとして活動する市民コーラスグループ、スタッフを含めて、総勢150名を超える大所帯での上演となりました。南城市の歴史文化遺産である玉城(たまぐすく)城跡を題材に、太陽と光の伝説、沖縄戦時の糸数アブチラガマでの悲惨な出来事を描いた物語です。ムラヤーとは、沖縄の方言で役場や公民館等の「地域コミュニティ」を意味します。



写真提供：シュガーホール

このミュージカルを通して、シュガーホールに人々が集い、つながるよという思いを込めて制作しました。長期にわたる稽古では、プロの実演家と市民が、年齢も性別も関係なくコミュニティを作り上げていきます。私たちスタッフも、出演者の成長や本番の成功を喜び、この作品に関わったすべての人々が大きな家族になったように感じました。

市民からのアイデアを柔軟に取り込んで

『企画塾』という事業があります。市民のための企画・運営講座と謳っていて、市民からのアイデア提案と協働を促し、シュガーホールの事業運営と一緒に考えていく人材を育成しようという目的で実施しているものです。ホールでやってみたいことを難しく考えずに企画し、実践してみるというスタンスです。いくつかのプログラムが生まれ、実現されました。

① ジンバブエとの交流コンサート

ジンバブエのジャナグルアートセンターから、伝統音楽を演奏する子ども4名、教員2名を招へいし、南城市の保育園児との交流コンサートを実施。言葉は通じませんが、ジェスチャーや軽快なリズム・音楽に、園児たちは終始笑顔が絶えませんでした。



写真提供：シュガーホール

② 映画上映会

沖縄県内の映画製作会社や配給会社と連携し、映画の上映会を実施。市内には映画館がなく、地域の方々からの要望によって実現したもの。好評ではありましたが、音楽専用ホールのため反響して音声が聞き取りづらいという課題もありました。

③ 赤ちゃん・家族写真の撮影会

南城市のキャラクター「なんじい」との撮影会を実施。少人数限定での試行でしたが、せっかくホールでの開催だからということで途中でピアノ演奏も挟み、コンサートホールならではの体験も取り入れました。ところが、演奏によって赤ちゃんが気持ちよく寝てしまって、撮影ができないというハプニングも起こりました。

この他に、『夢のプロジェクト』と題し、アイデア募集をしたこともあります。

舞台上でピアノを弾いてみたいという企画を採用し、ヤマハとスタインウェイの弾き比べを実施しました。丸一日、舞台を開放し、たくさんの市民がそれぞれの楽しみ方をしていたのが印象的でした。ピアノの特徴、音の違いを楽しむという面白さも感じてもらえたのではないかと思います。

また、『N-1 Kidsグランプリ』と題して、南城市ナンバーワンのキッズパフォーマーを決定する大会を開催。組体操、新体操、けん玉、縄遊び、竹馬、歌三線、芸達者な子どもたちがたくさん参加しました。

ムラヤーを育くむ場所

こうして市民がホールの企画運営に携わっていると、行政とは違う、市民目線の捉え方が見えてきます。もちろん、彼らには企画運営の経験がないので予算が増えてしまい、ホール側としてはハラハラさせられることもたくさんあるのですが、それでも会話のなかからは、起爆剤というか、とりあえず前へ進もうという勢いが生まれます。

この地で生まれ育った人、一度は離れたけれど戻ってきた人、別の地域から移住してきた人、地域の人々といってもいろいろな人がいます。いま住んでいるこの街を大切にしたい、もっと良くしたいと思ってホールに関わってくれる、そのきっかけをつくり出す。シュガーホールが、地域の人たちにとって新しい「ムラヤー」のような場所になれるよう、挑戦し続けたいと思います。

劇場の敷居を下げ、より多くの市民との接点をつくるために

山口 英樹	伊丹市立演劇ホール(アイホール) 館長
-------	---------------------

昭和から平成へ アイホールのあゆみ

アイホールは昭和63(1988)年に、当時の国鉄伊丹駅前の再開発事業の一環としてオープンし、今年で30周年を迎えました。200～300席の小劇場です。伊丹市は1987年に、まち全体を劇場に見立て、暮らす市民が主役ですというコンセプトの「劇場都市」宣言をしていて、その象徴として設置されたという経緯もあります。

開館当時は、関西の民間の劇場が活発な時代でした。アイホールも負けないよう、小劇場系の劇団を中心に多彩なラインナップを目指していました。しかし当時は市の直営で、市職員が企画運営をすることは難しく、そこで、民間からプロデューサーを招へいすることになり、関西のみならず、東京や名古屋で活躍している劇団の公演をどんどん実施していきました。

ただ、たくさん上演するだけでなく、市民との接点をつくることや人材育成を図らなければいけないという問題意識もありました。そこで、小劇場の人たちを登用した、小劇場らしい育成事業をということで、開館翌年から「アイホール演劇学校」をスタートさせています。

しかし、1995年の阪神大震災をきっかけに、事業部は大きく変わりました。予算がどんどん目減りしていくなかで、市民と関わる事業が急に増えていくこととなります。折しも、ワークショップという言葉が多く聞かれるようになり、公共劇場が普及啓発事業をやっていくことが当たり前という時代に入ったのです。公演とワークショップをセットにして実施したり、のちの「伊丹想流私塾」となった戯曲創作のワークショップは21年も続けました。

ターゲットの移り変わり

「アイホール演劇学校」は、俳優養成が目的ではなく、あくまで演劇の良き理解者を増やすというコンセプトで、1989年～1996年の8年間実施しました。そこで、今度は演劇に本格的に携わる人材を育成しようと、1997年～2005年は「アイホール演劇ファクトリー」を実施しています。これらの事業は、演劇をやりたい若手の受け皿になっていました。過去の参加者で、現在も活躍する演劇人が多くいます。

しかし少子化の影響もあるのか、関西で舞台を目指す若手人材はどんどん減少していく傾向にあります。大学で舞台芸術を学べる学科が増えたことも影響しているでしょう。そうすると、かつてアイホールに来ていたような青雲の志を持った若手も、学び先として大学を選択するようになり、「アイホール演劇ファクトリー」の存続は難しくなりました。

そこで2011年からは、一般市民を対象にした演技中心の指導をする講座『演劇ラボラトリー』を実施し

ています。もちろん20代もいますが、昔、演劇をかじっていて、やっぱり好きで再燃してしまったという方や、40代～70代の方々が多く参加されています。年間40回のワークショップを経て、最後に卒業公演をします。

普及事業として、現在の柱になっているもう一つが「伊丹想流劇塾」という劇作家養成講座です。OMS戯曲賞や、日本劇作家協会の新人戯曲賞を受賞するような作家を輩出するまでになりました。

夏休み期間には、小・中・高校それぞれの年代向けのワークショップも、かれこれ20年近く実施しています。最後に発表会をしますので、親御さんたち、つまりこれまでアイホールに来たことのない大人たちが多く来場します。劇場設備・機材をフル活用して演出しますので、発表会でここまでするのかと驚かれます。これも、劇場アピールの一つになります。

毎年3月には、「アイフェス!!」という中学高校演劇フェスティバルも開催しています。市内の演劇部の生徒でもアイホールに来たことがない人、劇場で芝居を観たことがない人はいます。ですので、劇場ではどうことができるのか、オリエンテーションの役割も担っています。毎回、近畿大会まで進出した他地域の高校演劇部をゲストとして招くことで、伊丹市の演劇部員たちに刺激を与えています。

積み重ねを無にしないために コンテンツを引き継ぐ

2018年からは新たに、未就学児向けのワークショップにも着手しました。

京都に「アトリエ劇研」という小劇場がありました。そこで10年以上にわたり実施されていたのが『かむじゅうのぼうけん』です。怪獣の「かむじゅう」の世界で、子どもたちが、観て、踊って、工作する、参加型の体験プログラムです。ところが、アトリエ劇研が閉館することになり、10年以上も継続されてきたコンテンツが無くなってしまふのは勿体ないと思い、ぜひアイホールでやらせてほしいとお願いしたのです。

実際のところ、参加者は早々に満員になりました。子どもたちも親御さんからも、満足度が非常に高かったです。これから芝居を観たい、観せたいと思っている人たちに対して、有効なプログラムだったのではないかと思います。



『かむじゅうのぼうけん』撮影：中才知弥

市民と舞台芸術の接点をつくる

アイホールは、伊丹駅前に位置していて、ガラス張りの建物です。しかし、公演等がある時はオープンしていますが、催事がなければクローズしているので、気軽に入ることができません。開館30年を迎えてもなお、敷居が高いとか、何をしているのか分からないといった市民からの批判を受けています。

もっとオープンにしよう、もっと気楽に来てもらうための事業を、ということで、土曜日の午前中にワンコイン講座を実施しています。「声に出して読む」、「ストレッチ・エクササイズ」といった内容ですが、これが50代～70代に大人気です。これまで観客としてアイホールに来ることがなかったタイプの方々が多く参加されています。こういう方々をいかに観客として劇場に引っ張ってこられるかが、我々の課題の一つです。

この課題に関連してもう一つ紹介しますと、「地域とつくる舞台シリーズ」というプログラムがあり、ちょうど今『味わう舞台』という催事を実施中です。伊丹市内の飲食店を会場にして、おいしい料理と芝居・舞踊をセットで楽しめるというイベントです。劇場へ足を運ぶ前段階として、食事をしながら舞台芸術にふれてみませんかという趣旨で、これも、芝居や劇場に縁がなかった人たちと、舞台芸術との接点をつくるための企画です。次のステップとして、今度はアイホールに来てくださいね、そういう気持ちで取り組んでいます。

日常と演劇をつなぐ公立劇団

田窪 哲旨	兵庫県立ピッコロ劇団 劇団部長
-------	-----------------

ピッコロシアターのミッション

兵庫県立尼崎青少年創造劇場・ピッコロシアターは、昭和53（1978）年に開館しました。演劇専門、かつ人材育成を視野にいた、当時としては珍しい公立劇場だったと思います。開館から5年後の昭和58（1983）年に「ピッコロ演劇学校」、平成4（1992）年に「舞台技術学校」を開設。長年にわたり培ってきた人材育成事業の集大成として、平成6（1994）年に設立されたのが、全国初の県立劇団である「兵庫県立ピッコロ劇団」です。

劇団ですから、当然、公演活動を一つの柱にしています。しかしアイホールと同じく、阪神・淡路大震災以降は活動に変化がありました。1995年1月の震災の翌月から、52ヶ所の避難所の子どもたちのもとへ小作品の出張公演をしました。今になって思えば、劇団にとっての最初のアウトリーチ活動でした。

現在も、地域の課題解決、地域コミュニティづくりへの貢献は、ピッコロシアターの重要なミッションとして位置付けています。これが、ピッコロ劇団のアウトリーチ活動の後押しになっています。

時代の変化による期待の高まり

また、時代の変化がアウトリーチ活動を後押しした面もあります。この20年ほどの間に、文化芸術を取り巻く法律の整備、公的助成制度の変遷といった、私たちの活動に影響を与える大きな環境変化がありました。そうしたなかで我々に求められているのは、鑑賞機会の提供だけでなく、市民の参加を促す取組を実行すること。これまで以上に、年齢、障害の有無、経済状況、居住地域に関わらず機会を提供することが求められるようになりました。

また、教育機関、福祉機関、医療機関等、異分野との連携協力も言われるようになりました。ピッコロシアター、ピッコロ劇団とも、公的助成を受ける側として単なる公演活動にとどまらず、普及啓発活動や社会貢献が求められていると感じます。

一方で、教育現場もどんどん変化してきています。ピッコロ劇団が設立された1994年は、高校に総合学科が導入された年です。1990年代後半頃からはコミュニケーション能力が重要視されるようになり、平成12（2000）年からは学校で「総合的な学習の時間」が段階的に始まりしました。そうしたなかで、演劇が持つ力が注目されるようになっていったのだと思います。2000年代に入った頃から、ピッコロ劇団でも「総合的な学習の時間」のお手伝いの依頼を多く受けたという記憶があります。

また、民間企業による社会貢献活動への意欲の高まりもあったのではないのでしょうか。

地域密着！だからこそできる取組

そういった変化のなかでも継続してきた、ピッコロ劇団の公演以外の取組を紹介します。一つは冒頭でも紹介しました「ピッコロ演劇学校」「舞台技術学校」です。通年で、今年も約80名の生徒が学んでいます。外部からも講師を招きますが、とくに演劇学校では、劇団員が中心となって講師を務めています。

また、人材養成ということであれば、新国立劇場演劇研修所（東京）でも、ピッコロ劇団員が講師を務めています。今年初めて、この研修所の修了生がピッコロ劇団へ入団しました。

とくに連携を深めている教育機関として、近畿大学、甲南女子大学、兵庫県立宝塚北高校演劇科、大阪市立咲くやこの花高校などに、通年で劇団員を派遣しています。また、西脇市のすべての公立小学校（8校）の5年生にも、コミュニケーションワークショップを提供しています。

赤穂市立城西小学校、養父市立建屋（たきのや）小学校では、芝居づくりを通して地域の歴史を学ぶという学習をしています。城西小学校では、忠臣蔵の子ども版といった作品『子ども義士物語』を毎年、6年生が創作・発表します。1年生の時から毎年、6年生になったら自分たちもやれるんだ、と楽しみに上級生の

発表を観ているんですね。殺陣を含めた演出等、ピッコロ劇団員がお手伝いをしています。年ごとに子どもたちの工夫や特色があって、物語が伝えられていくんです。建屋（たきのや）小学校でも、地域の歴史を芝居にします。この学校は、県内といえどもピッコロシアターからはかなり遠いのですが、劇団員が学校へ行くだけでなく、児童たちがコウノトリ但馬空港から飛行機に乗ってピッコロシアターまで我々の芝居を観に来てくれたり、そんな交流も生まれています。この他、県内の特別支援学校でも、ワークショップや出張公演をしてきました。

県内の企業の新入社員研修、自治体職員の幹部候補生の研修にも協力しています。また、子ども向けのワークショップ『あつまれ！ピッコロひろば』を、地元企業の社会貢献活動の一環として、福祉施設で生活する子どもたちを対象に実施しています。子どもたちを公演に招待したり、コミュニケーションワークショップを実施したり、ピッコロ劇団を活用して、社会貢献に取り組まれている事例が少しずつ増えてきました。子育て支援団体と協力し、読み聞かせ会等も実施します。

こうして県内各地、乳幼児から大人までさまざまな世代に向けた活動を展開しています。

熱意をシェアして実現へ 在日外国人に向けた取組

地域在住の外国人を対象に実施した『にほんごであそぼう』というワークショップを紹介します。これは、文化庁と公益社団法人日本劇団協議会が主催する、高齢者や社会に出られない若者、特別支援学校等を対象にコミュニケーションワークショップを行う一連のプロジェクトの一環で行われたものです。日本劇団協議会からの呼びかけに、小野市うるおい交流館エクラ（以下、「エクラ」）から、実施希望の手が挙がったことから企画がスタートしました。

兵庫県内ということで、ピッコロ劇団と一緒に企画づくりからしていくことになったのですが、まず小野市にはどんな地域課題があるか、エクラは調べました。小野市は工業団地があり、居住する外国人も多く、そのなかには日本の地域社会に馴染めない方々も多いことが分かり、小野市在住の外国人に向けたワークショップを実施することにしました。

内容を検討する段階では、NPO法人小野市国際交流協会さんも交え、エクラ、ピッコロ劇団の三者で、在日外国人が抱える問題、事例を共有していきました。例えば、母国では優秀だったけれど、日本語が分からないためにテストで良い点が取れなくなり、プライドが傷つけられ引きこもりになってしまった青年。学校で、「試験勉強？私ほしくないよ」という会話を鵜呑みにしてしまい、自分だけ点数が悪かった子ども。燃えるごみの日に酒瓶が捨ててあるのを、きっとあの外国人だ、と疑われてしまった人（イスラム教徒）。日常会話では日本語教室で習うきれいな日本語が使われないので、会話についていけず、会社と寮の往復だけの生活になってしまった人。

プログラム実施までに、かなり丁寧に何度も打ち合わせを重ねました。事前打ち合わせが3～4回、当日も実施前に2時間ほどの打ち合わせ、実施後も1時間以上の打ち合わせをしています。この取り組みに携わった人たち、エクラ、そして小野市国際交流協会の皆さんの、仕事を越えた熱意があったからこそ実現できたのだと思います。

その上で、プログラムの目標として設定したのが次の5つです。楽しいよ、出ておいでよ、と声掛けするきっかけにしたいという思いがありました。

- 安心、安全な環境のなかで、自由な自己表現を互いが受け入れる場を提供する
- 日本人とふれあい、日本語を使うチャレンジをする場を提供する
- 外国人同士のコミュニティを形成する場を提供する
- 日本語や学校の勉強に対する意欲を高めること
- 最終的には、地域コミュニティに溶け込み、日本の生活における自己肯定感の向上をめざす

にほんごはむずかしいけどたのしい

外国人もいろいろな勤務形態の人がいるということで、実施時間は比較的参加しやすい時間帯を、小野市国際交流協会と相談して決定しました。チラシも、漢字にはふりがなをふって、いつ、どこ、お金いらなくて、と難しい言葉を使わないようにもしました。

計3回実施し、1回目は5ヶ国15名、2回目は6ヶ国35名、3回目は10ヶ国27名の参加がありました。2人1組でのあっちむいてほい、数人1組で体を使って文字や生き物・場面を表現するもの、遊び感覚で実践できるものを取り入れました。

しかし実際やってみるなかで、やはり言葉の問題はありました。日本語の習熟度にはかなりの差があります。「私たちは劇団員です、俳優です」という我々の自己紹介が通じない人もいます。母国語がみんな違うので、各々がスマートホンの翻訳機能を使っていました。形態模写のアクティビティでも、「市場」が何か分からない、じゃあ何なら分かる？と運営側や参加者と話をしながらやっていきます。

それから、宗教上の問題への配慮も必要です。手をつなぐことが難しい人もいることを念頭において進めました。

何のために日本に来ていて、日本語の習熟度はどれぐらいか、宗教は、家族構成は、性格は引込み思案かリーダー的か、事前に参加者の情報を共有して、その人の力を発揮できるようにいねいに考えました。

一度きりで終わらせないために

もちろん、今後の継続を検討するにあたっては検証が必要ですが、在日外国人向けワークショップの初段階の成果としては、安心・安全な環境で、日本語を使って楽しく学ぶ・遊ぶという体験を提供できたのではないかと思います。参加者同士も、実施後に話し込んでいたり、お互いの連絡先を交換したり、コミュニケーションが生まれていました。小野市国際交流協会の方々も間に入って、参加者同士を引き合わせたり、積極的にきっかけづくりを行なわれていました。

引きこもり状態にあった人も参加してくれました。1回目より2回目の参加人数が増えたのは、SNS等を通じて、楽しかったという口コミが広がったからだと思います。動画を見たら楽しそうだ、気軽に日本語で遊べるようだ、ということが分かっていただけたような気がします。

今後も、これによって日本語で話す機会が増えたかどうか等、継続的に今回の参加者へのインタビューや調査を続けていきたいと思っています。並行して、継続実施に向けた予算獲得や、協力依頼を進めていきたいと思っています。



写真提供：ピッコロ劇団



写真提供：ピッコロ劇団

パネルディスカッション

進行：森岡 めぐみ (いずみホール)



森岡 私は大阪にある民間のクラシック音楽専用ホールに勤めています。民間ですが、人材養成、普及啓発として、文化庁から助成を得て事業展開もしています。公立劇場の皆さんと少し違った視点もあるのかなと思いますが、意見交換ができれば幸いです。

さて、3人の事例紹介をお聞きして、まずシュガーホールについて。私も伺ったことがあります。那覇からバスだと50分ほど、結構な時間がかかりますし、本当にサトウキビ畑のなかにありますよね。劇場スタッフが「こうあるべき」と考えるのではなく、地域の皆さんからアイデアをいただく。たった1回の訪問でしたが、若い人、ファミリー層、いろいろな方が来ているなと感じました。

それからアイホールは、私も演劇が好きなのでよく伺いますが、いつも意欲的だなと思っていました。時代の流れを掴んで、人を育てているなと感じます。

ピッコロシアター・ピッコロ劇団は、今日はアウトリーチの事例に特化してお話いただきました。本当にいろいろな取組を県内でやられていて、私たちも考えさせられましたね。

今日のテーマは「市民と芸術をつなぐ」ということですが、簡単に回答が出ることではないと思います。このフォーラムでは、事例や意見を持ち寄って共有することを目標としていますので、ぜひフロアの皆さんからも質問や意見があればお願いします。

それではまず私から、シュガーホールの知念さんに質問です。市民からアイデアを募集して劇場の事業に取り入れていくというのは、私も考えたことはある

し、できたらいいなと思うのですが。実際に実現するまでに、苦労した面や工夫した面をもう一度聞かせてください。

知念 市民アイデアは、事業予算の枠組みは決まっていますが、年間の事業本数は決めていません。まずは、やってみたいことをどんどん挙げてもらっています。先ほどのピアノの企画（44ページ参照）にしても、舞台上でピアノを弾いてみたいという思いが先あって。それから実現に向けて、どんな準備が必要かを考えていく。もちろん、予算面で初めから難しい企画もありますが。

やりたい思いと、実現可能かどうかを、企画塾のメンバーである市民と、劇場スタッフとで協議して、やりたい企画+できそうな企画を絞り込むよう配慮しています。

森岡 ついつい集客も気になるのですが。広報はどのようにしているのですか？

知念 劇場スタッフも、トライアル企画という気持ちでやっている部分もあります。ただ、通常のコンサートとは違ったお客様が多いという印象があります。

広報も市民中心でやるのですが、なかなか劇場スタッフでは思い浮かばなかったアイデアが出てくることもあります。

それから、関係する人たちが増えていくと、口コミというか、劇場スタッフだけではできないことも市民の力を借りて良かったと思う点もあります。

森岡 やはり都市部とは違って、お互いの顔が見える人間関係ができていて、それが強みにもなっているのでしょうか？

知念 そうですね。口コミとか人脈とか、そうした広がり強さはあると思います。

森岡 ありがとうございます。次に、アイホールの山口さん。これまで劇場に来なかったタイプのお客様を得たワンコイン講座について、もう少し詳しくお話をお願いします。

山口 我々がチラシを作る時には、ついつい格好いいもの、インパクトが強いものを考えがちですが、ワンコイン講座の場合は、講座のタイトルが重要だと思っ

ています。とにかく分かりやすく、チラシを見た人が「おっ」と思うネーミングかどうか。白黒刷りの簡易チラシであっても、反応はあるんです。ある時は「ダンサーと一緒に腹筋を割りましょう」というタイトルでやりました。我々が今まで捉えていなかった層にもアピールできる、ということをしごく感じています。

もう一つタイトルの例を挙げると、アイホールで朗読講座を企画した時には、『声に出して読む』という講座名にしました。詩、小説、あるいは絵本や、あなたの身の回りにある言葉を読みましょうという趣旨です。この講座は、関西で活躍する俳優が講師を務めました。講座に参加して接点を持ったことで、参加者たちが講師の出演する舞台を観に来てくれたりするんですね。

森岡 そのものズバリのネーミングとか、それを実際にやってしまうというのは、決める側である劇場スタッフに決断力がなければできないですね。今は本当にアピール力というか、Youtube等で発信しても観てもらうためにはネーミングは重要です。私も広報担当者として参考になりました。演劇という劇場の軸があり、そこから派生して事業をつくり、最終的には目的につなげていく。見事な戦略ですね。

では次は、ピッコロ劇団の田窪さんにお聞きします。心を動かすワークショップの数々を紹介いただきました。企業向け、引きこもりの人たち向け、外国人向け、さまざまですが、内容の作り方はどのようにされているのでしょうか？

田窪 現在、劇団員は35名です。舞台活動だけの団員もいますが、舞台活動と並行して普及活動やワークショップファシリテーターとして長く経験を積んでいる者がいます。そのなかでも、子ども対象の経験が多い人、大人向けの経験が多い人、いろいろ経験値があります。ですから、劇団員がお互いの経験を持ち寄って、少しずつ劇団内の人材育成をしています。実施までの事務的な手続きは劇団事務局が行いますが、打ち合わせには劇団員も同行し、ディスカッションして内容を提案しあっています。

森岡 ワークショップの依頼を受けてから、事前調査、依頼者の事情を聞くということは重要なんですね。

田窪 本当に大事だと思います。先方も忙しいのですが、いかに時間を取ってもらえるか、いかに共有

していけるかが、プログラム自体と同じくらい大事だと肝に銘じながらやっています。

森岡 そうしたなかでも苦労された点、あるいは思いがけず上手くいった例はありますか？

田窪 よく聞くことですが、学校アウトリーチでは、熱心な教員が異動になってしまうと、その学校との縁が切れてしまうことがあります。ですから、ワークショップや公演を実施しての成果を「見える化」して、担当者が変わっても継続できるように、学校内・団体内・施設内で共有してもらうことが大事だと思います。継続のための予算獲得の上でも重要です。

森岡 ありがとうございます。今日は、第一部から、まだまだ知らない事例が全国にはたくさんあることを実感しています。ここからは、フロアの皆さんからもぜひ質問、事例紹介、ご意見あればお願いします。

参加者A 大阪を拠点とする人形劇団の者です。田窪さんにお聞きします。実は私の劇団でも、学校で芝居づくりを通じた地域の歴史学習という依頼があり、これから始まる所です。地域の歴史を調べるということは、どのように実施されましたか？

田窪 赤穂市、養父市の学校では（47ページ参照）やはり熱心な先生がいて、子どもたちが地域の歴史を調べる部分は、学校側でやっていただきました。なので、題材をいただいて、それを台本にするところから我々はお手伝いしています。

山口 アイホールでも「地域とつくる舞台」という企画で、2015年から2017年の3年間かけて実施した『伊丹の物語』プロジェクトがあります。これも、いかに地域の人たちと関わりを持つかがテーマでした。地域の皆さんに、伊丹の古い写真を、それにまつわるエピソードと一緒に提供を呼びかけました。

1年目は、提供された写真の展示会をしました。すると、地域のお年寄りたちが見に来て、「懐かしいな～」という反応があって、その人たちからまた話を聞いて、さらにエピソードを集めました。

2年目には、収集したエピソードを短編物語にして、写真を投影しながらリーディング公演をしました。

そして3年目には、リーディング公演に使用したエピソードも盛り込んで、写真を投影する演出も駆使して『さよなら家族』という演劇作品をつくりました。

例えば、1970年の大阪万博でタイ国からやってきた象16頭が、神戸港から吹田市千里の万博会場まで、国道を行進したという珍事がありました。50代以上の人は当たり前知っている事件も、若い人は知らない。物語はフィクションなんだけど、写真があることでリアリティがあって、とても面白かったです。



『さよなら家族』撮影：堀川高志

のちに、この手法で同様の企画が他地域でも行われました。担当した劇作家・演出家があみだした手法ですが、どこの地域でも汎用性があることが実証されて、我々としても大きな成果がありました。

森岡 昨今、写真はとくに若い人たちにとっては、インスタグラムなど、コミュニケーションのツールの一つになっていますよね。それを集めると地域の物語が見えてくると。

シュガーホールも、地域の物語を題材にミュージカルを創作されたということでしたね。

知念 市民ミュージカルは、地域で語り継がれている民話、歴史文化にまつわる実話を織り交ぜて台本にしています。

森岡 やはり地元の人にはグッと引き付けられるわけですね。

知念 そうですね。作中に実在する史跡等が登場しますし、身近に感じられるようです。

参加者B 東京にある劇場の者です。知念さんにお聞きします。シュガーホールの『企画塾』は、参加者の募集、企画実現までにどれくらいの期間を要しているのか、スキームをお伺いできればありがたいです。また、それに対する劇場スタッフの運営体制はどのようになっているのでしょうか？

知念 『企画塾』はいろんな企画と一緒に実践しているという趣旨で立ち上げられ、結成して約5年になります。実は私も、『企画塾』の出身なんです。

メンバーには、市役所職員、ラジオパーソナリティ、市民コーラスの団員、PTAの方などがいました。あとは、企画公募の際に応募した人がそのまま一緒に活動してくれているというケースもあります。およそ10名ほどで年間通して活動しています。

実現する企画数は、年間最大4本ほど。シュガーホールの主催事業として実施するので、劇場が事務局担当になりますが、実務や作業には市民にも参加してもらう手法を取っています。

参加者B ありがとうございます。田窪さんにもお聞きしたいのですが、『にほんごであそぼう』の広報はどのようになされたのか、またパートナーとなった小野市国際交流協会とはどのような経緯で出会ったのでしょうか。

私の劇場でも今年初めて、不登校の子どもを対象にワークショップを実施しました。初の試みということで、NHKや大手新聞社にも取り上げられたおかげで参加者は集まったのですが、しかし継続していくとなると、対象となる人たちへどのように情報を届けられるかが課題だと感じています。

田窪 まず広報についてですが、小野市国際交流協会が行う日本語教室や外国人向けのイベントでのチラシの配布、市内の学校への協力依頼、公募がメインです。

チラシづくりでは、とくに小野市国際交流協会の20代スタッフのアイデアが素晴らしかったです。事業の正式なタイトルは、「お芝居づくりをとおして日本語を勉強しよう。体験しよう」なのですが、単刀直入に分かった方がいいということで『にほんごであそぼう』というサブタイトルを大きく掲げました。いつ、どこ、お金いらさないです、と表記も分かりやすく。じわじわと、すごくいいチラシだなと感じています。それから、来てほしいと思っている人のところへご自身で足を運んで、丁寧に呼びかけしたり、メールをしたり、当日も迎えに行ったりされていました。本当に熱心で、我々も助けられました。

継続したいという思いは、関わったみんな共通なのですが、それにはいかに学校からの協力も得られるかが課題だと感じています。

小野市国際交流協会との出会いは、エクラからの紹介です。実は、ピッコロ劇団が20年ほど前に、加東市（小野市の隣）で子どもたちと芝居づくりをしていたことがありまして。当時の担当者が現在、エクラの

理事なんですね。そうしたご縁で、「お久しぶりです」という再会があってエクラとつながりました。そして、たまたま、エクラのなかに小野市国際交流協会のデスクが置かれていたんですね。NPOなので毎日稼働しているわけではないのですが。

それで、エクラが地域課題の解決にむけたワークショップをやりたいとなった時に、小野市国際交流協会がいろいろ課題を抱えているようだと。継続的に一緒に取り組んでいくのに相応しい団体だろうということで、エクラから紹介してもらったんです。エクラと小野市国際交流協会の信頼関係があり、エクラとピッコロ劇団との信頼関係があり、それがつながって。とても幸運な出会いでした。

参加者C 広島にある劇場の者です。知念さんにお聞きします。『企画塾』では、劇場スタッフはどのくらい介入しているのでしょうか？

知念 ほぼ100%ですね、ずっと一緒に関わっているという形ではないですが。アイデアは市民から、法的な部分、予算の部分は劇場スタッフが調整しています。会議は月に1回ほどで、あとは準備作業がある度に集まってもらいます。働いている方がほとんどですので、会議も夜や深夜が多いんですね。それにも劇場スタッフが同席して、話し合いを見守っています。方向性は極力、市民に決めてもらうようにしています。

劇場スタッフも、他の自主事業の運営とは身構えというか、少し違ったやり方で進めているような部分もあります。

参加者C 山口さんに、未就学児向けのプロジェクトについて、もう少し詳しくお聞きしたいです。

山口 『かむじゅうのぼうけん』は、参加型演劇という趣旨で朝11時から昼15時まで、鑑賞の時間、お弁当を食べる時間、工作の時間があって、最後はみんなで踊って、という盛りだくさんな内容です。4時間という長いようですが、物語形式でいろいろな時間をつくっています。

アイホールは床が可動式の劇場ですので、水気は厳禁なのですが、でも演出として、舞台上でお弁当を食べたい、ピクニックがしたいということで、舞台全面を養生しました。通常の劇場の使い方とは全く異なるんですね。

3歳〜4歳児にお芝居を観せるのは、なかなか難しいです。でもこの企画では、どんどん騒いでいいぞ、

舞台上が上がっていいぞ、と。親子で参加できることも大きな特徴です。もっとやって、という声が挙がるくらい、参加者の満足度は非常に高かったですね。

森岡 小さい子どもがいると、子どもとどうやって過ごそうかと、親は悩ましいことがあるんですね。劇場でできる、家族の行事づくりに面白い企画ですね。

まだまだお話をしてみたいのですが、残念ながら時間です。これからもいろいろな事例を共有する場をもてたらと思います。ありがとうございました。